



西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日~十月八日

### 仅有一幅小品

自9月23日“九州派展”开幕以来，越智修连日奔波于福冈市美术馆。然而展厅里，这位“九州派天才少年”时期的作品仅存一幅微型画作。由于缺乏保管空间，他九州派时期的作品已无一留存。

因此他早在展览数月前便兴奋地投入创作。为在由原九州派成员负责运营的近作展区一决高下，除标志性的油画作品——画面中悬浮着无数球体外，更以五十一张采用胶印工艺的胶合板巨幅作品铺满墙面，六件立体装置陈列于地面，彻底占据了整个展厅。

越智在展厅中踱步沉思：“昔日的九州派聚会，作品刚摆上桌，众人瞬间杀气腾腾，优劣分秒即定。当意识到‘输了！’的刹那，次年的创作构想便已成形。”他低吼着：“这次也要拼命画个够！”几年前因酗酒而令人担忧其复出的空洞眼神，此刻已荡然无存。

### 痴迷于樱井

九州派的诞生可追溯至樱井孝身(法国)与越智的相遇。1955年二科展上，樱井被越智横空出世的才华所折服，主动接近他，由此催生了组建艺术团体的契机。

在九州派中，越智与菊畑茂久马(福冈市)共同成为该派代表性作家。美术评论家中原佑介评价越智是“最充分体现反现代艺术主张的作家”。二十出头的多感青年欣喜若狂。与此同时，他深深迷恋着提拔自己的年长八岁的樱井。

“樱井先生说‘九州派运动终将大放异彩’，我虽不明白运动的意义，仍追随而去。”他虽曾叛逃离队，却始终与樱井保持联系并迅速回归。“我意识到自己无法离开樱井先生。”

## 白日梦的世界

九州派进入解体期的 1940 年，樱井远渡旧金山。次年，越智也追随而去。当时三十岁的越智坦言赴美“并无目的，只是履行了约定”。他从日本餐厅的洗碗工做起，学会烹饪后便一边当厨师一边作画。他参与了旧金山举办的第二次九州派展览（1967 年），1968 年更与浦田宗夫（东京都）仅两人共同举办了第三次也是最后一次九州派展览。

在嬉皮士聚集、反越战运动沸腾的旧金山，樱井也经历了 LSD 的洗礼。他持续思考着“如何将迷幻幻觉之美深化为绘画”。为追求“奔涌而出的美感”，最初描绘郁金香，继而转化为太阳，最终演变为球体。

起初在画布上逐个绘制球体，1969 年归国后球体数量逐渐增多。“球体象征地球。通过增殖地球让人类获得幸福”——他曾赋予作品哲学意义，但后来逐渐认为“画作只要美丽就足够”。于是诞生了《白日梦》系列：红、紫、黄、绿等鲜艳球体在宇宙空间无限延展，至今仍持续将观者引向白日梦境。

## 新的展翅

越智曾有过沉溺于酒的噩梦般日子。起因是经济问题——“靠个展收入和妻子打工勉强维持生计，但总差一点。和妻子吵架后就喝酒”。他或许也曾为与当年被美术杂志吹捧的青年时代形成的巨大落差而苦恼。饮酒量急剧增加。最终连扶着墙都无法行走，被送进医院住院八个月。

住院初期，他意识朦胧时竟执意索要彩色铅笔和色纸——事后才得知此事。珍藏的里尔克诗集不知何时被画满无意义的线条，还添上了郁金香的图案。“原来我真的热爱绘画啊”，他意识到这一点后，痛惜因酗酒而荒废的创作岁月。

1985 年 2 月出院。“妻子给了我五年时间实现完全康复。”他决心创作二十幅 130 号巨作。如今已完成五幅。连自己都惊讶于这般康复速度。“画技虽退，却更显力量感。”勤劳的妻子近日提议扩建画室。“没钱啊”他嘴上这么说，神情却已舒展。他打算以即将举办的“九州派展”为跳板，再度振翅高飞。

# 前衛者の軌跡

九州派から四半世紀

<5>

小島が一歩付  
「九州派」が開闢した九  
月十三日、オチ・オサ  
ムは連日、福岡市美術館に通  
っている。だが会場には九  
州派の天才見時代の作品は、  
ちっぽけな絵が一点あるき  
り。保管する場所がなく、九  
州派時代の作品が残っていな  
いのだ。

だから、同展の教員自前か  
ら開催して制作を促した。元  
九州派が運営を担った近作  
コーナーで勝負するためだ。  
トレードマークとされる無数  
の球体が画面に浮かぶ油彩の  
ほか、オフセット印刷を用い  
たベニヤ板大の作品五十一  
点を展示し、オチ・オサムを  
床に置いて完全に「室を独占  
した」。

## 殺気を思い出し

## 空白を埋める

「九州派」の運動  
はいつか日の目  
を見る、という  
桜井さんに、運  
動の意味も分か  
らないままとい  
っていったとい  
う。適反して飛  
び出したことが  
あるが、桜井と  
だけは歴史を統  
けたし、さらに  
復帰する。「桜  
井さんとは別れ  
きり」と思っ  
たようになつた

前のうつろな目は、もない。  
桜井に心酔して  
九州派は桜井孝身（フラン  
ス）とオチの出会いが火種に  
なつて誕生したと見える。昭  
和三十年の福岡で、いさな  
八幡上野の桜井に心酔する、  
なかつた。たが約束していた  
九州派を創設している、

オチ・オサム

<福岡市>



カンバスに向かうオチ・オサム氏

からの発表だった。日本レ  
ストンの血洗いから始り、  
料理家を経てからはコックを  
しながら絵を描いた。サンフ  
ランシスでの二度目の九州  
派展（四十二年）に参加。四  
十三年には浦田宗夫東京都  
と二人で、三回目を最後に  
「あぐれ出るような美し  
さ」を求めてまずニューヨーク  
に飛んだ。それが大膽に愛  
を注いだ。

わり、球体へと移っていった。  
初めは球を一個ずつカンバ  
スに描いていたが、四十四年  
に描いてからは、球の数が  
次第に増えていった。「球は  
地球を表現して人類  
も幸せになれるもの」など  
と哲学的な意味づけもしてあ  
るが「絵はきれいさであれ  
ばいい」と思つたことになる。  
そして、赤や黄、緑など  
鮮やかに輝く大小の球体が宇  
宙空間に無限に広がるような  
「コイ・ドリーム」のシリー  
ズが生まれ、今も続いて見る  
人々を日常の世界に誘つた。  
新たな羽ばたき  
そのオチに描かれた膨  
大な球体があつた。原因は経  
済的なことで「個展の売り上  
げと安房のパートで生活はで  
きぬ」が、ちよつと足りな  
い。オチ・オサムは美術雑誌でも  
やられた若い日のキャンパ  
スの絵に悩んだところであつた。  
だが、意図的に画面が埋ま  
つていくには嫌になつて、あ  
いまいはなくなり、肉體にかつ  
き込まれ、八月月餅も入らず  
るようになった。  
入院初期、意識がもうろう  
とした状態なのに色鉛筆や色  
紙を欲しがつたところであつ  
た。大事にしていたリル  
グの時集にいつの間にか意味  
不明の線が引いたり、チュ  
リップを描いたりしていた。  
「オチは本音が好きだつ  
たと知り、闇のせいで描け  
なかつた生活を悔やんだ。  
六十年二月に退院、「完全  
回復までに安房が五年間の猶  
予をくれた。百十号の大  
作を千枚揃く決心をした。  
今、五枚完成、自分でも驚く  
回復ぶりだ。絵は下手にな  
つていた。でも力強くなつ  
た。働いていて奥さんが最  
近、アトリエを建てて、増す  
と言いつつ、愛情がゆ  
る。今度の「九州派」を  
スナップに、もう一度羽ばた  
くのだ。」  
（吉田 浩記者）  
九州派展（10日まで、福岡  
市中心区大塚公園、福岡市美  
術館）